高校「倫理」における「宗教と人生」の取り扱いと評価

東京都立航空工業高等専門学校　和田　倫明

１．問題の設定

(1) 授業と効果測定

「倫理」の授業を主として担当してきた私は、「倫理」の授業が学習者にどのような影響を与えているのか、常に関心を持ち続けてきた。「人間としての在り方生き方」教育や、「心の教育」など、「倫理」授業が果たすべき役割とそれに対する様々な意見が提示されながら、そしてそれらに基づく様々な授業実践が報告されながら、それらに対する実証的な評価がほとんど見られないことに、問題意識を持ち続けてきた。カウンセリング心理学を改めて学ぶために大学院に入りなおしてから、統計的手法を用いた効果測定の方法を授業に用いることはできないかと考えるようになった。

(2) 授業内容としての「宗教」

「倫理」における「宗教」は、先哲思想として扱われ続けてきた。新指導要領においても、「人生における宗教のもつ意義」という扱いで、「単に知識の集積として」学ばせるのではないにしても、その基本的な枠組み、つまり考える手がかりとすべき思想という扱いには違いがない。しかし、「現代社会」においては、「日常生活と宗教や芸術とのかかわり」という、「倫理」とは異なった視点が示されている。ここには、宗教の①「思想」としての側面と、②「生活文化」としての側面が現れている。しかし、宗教には社会的存在としての③「教団」としての側面、さらにはそもそも宗教心はいかにして生じるかという④「宗教心」としての側面、ほかにも歴史とのかかわりなど、多様な扱い方があり、しかもこれらを関連付けて見ていかないと、現実の宗教的な現象の前に、「倫理」で学んだことは部分的・断片的で無力なものにとどまる。

２．研究の経緯

(1) 「比較・解釈」作業による異文化理解学習

かつて「現代社会」の異文化理解の分野で、文化人類学のモノグラフをいくつか読ませては、感想を読みあい、さらに感想を書くという「比較・解釈」学習を試み

た。このときには、独自の社会的態度尺度と、ロキーチの独断主義尺度を用いて効果測定を試みている。これは、認知的アプローチが学習者の態度変容にどのように影響するかという観点で取り組んだ研究として、國分康孝先生のご指導をいただきながら、私の修士論文となった。

(2) 「家族」の授業

異文化理解学習を通じて、「家族」のありかたに関心が深いことがわかり、また指導要領の改正に伴い文化分野の扱いが減ったこともあって、次に「家族」についてモノグラフやドキュメンタリーを用いて「比較・解釈」学習を続けた。この過程で、課題ごとに比較・解釈を繰り返していくのではなく、数課題まとめて行うことや、最後の場面でグループ学習を取り入れるなどの試行を行った。効果測定としてはモラルジレンマなども試みたが、比較的簡便で黙従傾向が出にくいと思われるSD法に行き着いた。

(3) 「宗教」の授業へ

かつて「オウム真理教事件」に直面して、「倫理の授業は何だったのか」、あるいは「倫理の授業でもっと何かできないか」という問いを持たなかった倫理教師は少ないであろう。また「9.11」などに直面して、さらに宗教一般への無造作な忌避感を強めかねないという危機感を持った教師も少なくないであろう。しかしまた、オウムそのもの、9.11そのものは、宗教をさらに超えたところに広がる問題を含んでおり、宗教テーマの素材としてはやや重すぎた。

そこで、次のような展開を試みた。まず「宗教とは何か」について、先の④「宗教心」と②「生活文化」としての側面を詳しく扱い、そこで誰もが「宗教心」をもち「生活文化」の中に宗教を保ち続けていることを自覚させる。続いて、①「思想」としての側面を学びながら、並行して③「教団」を今に生きる宗教の中に例示しながら、これらを統合する素材としてのプリント教材やビデオ教材を用いる。これらの教材のポイントは、「現代に生きる人間が、どう宗教にかかわっているか」である。たとえば仏教ではタイの出家した若者のインタビューや、タイのビジネスマンが出家修行を果たすドキュメンタリーを用いる。これらについての感想を書かせ、読みあい、読みあった感想を、さらに書かせるという、比較・解釈の方法をとる。

(4) 効果測定の方法

効果測定には、オスグッドのＳＤ法(Semantic Differential Technique, 意味差分法)を用いることにした。これは40の形容語対を用意し、ある言葉、ここでは「宗教」が、そのどのあたりに位置するかを、７件法で答えさせていくものである。これを理想的には年間４回程度行って、「宗教」のイメージがどのように変わったかを、統計的に分析する。ただし、実際には年３回の実施が今のところ限度である。

３．研究の結果

「宗教」テーマの授業は、ここ３年、ほぼ同じ教材を使用して実施した。平成12年度には授業の直前直後に、13年度には授業の直前と学年末に、14年度には直前直後と学年末に、それぞれＳＤ法を実施、結果を分析した。年度ごとの比較は難しいが、いずれも「宗教」の認知に、有意な変化が生じていることが推測される結果となった。すなわち、「宗教」のイメージが、[堅苦しい→気軽な]・[高価な→安価な]・[しつこい→さっぱりした]・[退屈な→興味深い]・[型にはまった→自由な]といった方向に、有意に変化していることが統計的に確かめられた。

４．今後の課題

果たしてこれらの変化は「倫理」授業の影響なのか、ほかの授業方法ではこれらの変化は生じるのか、13年度の変化の少なさは「9.11」効果か、など、実証はなかなか困難ではあるが取り組みがいのある課題は残されている。また、他分野への援用もさらに試みてみたい。

主な参考文献

(1)　岩下豊彦『ＳＤ法によるイメージの測定』，川島書店，1983

(2)　Rokeach, M., The open and closed mind. Basic Books, 1960

(3)　和田倫明「『比較・解釈作業による異文化理解学習』の指導上の意義」，東京都立航空工業高等専門学校研究紀要第29号，1992

(4)　和田倫明「『比較・解釈作業による異文化理解学習』が認知体制および社会的態度に及ぼす影響の研究」，東京都立航空工業高等専門学校研究紀要第29号，1992

(5)　和田倫明（共同研究）「高等学校公民科の授業の改善に関する研究」，国立教育研究所，2000